



愛の人妻 ウォッチング

10人の人妻の不倫という
愛

音川伊奈利

小説「愛の人妻ウォッチング」その1・人妻との探偵ごっこ...麗美

JR西大路駅からイオンまで歩いて7分ほど、その道を一際綺麗な髪型と化粧、それに化粧品メーカーの制服で通勤している人たちがいる。資生堂、カネボウ、コーセーなどの美容部員だが、これは一目でどのメーカーかはわかる。その一つのメーカーの美容部員の麗美さんと顔なじみになったのは私が毎日行くモーニングの喫茶店でもうかれこれ1年ほどになる。

家は高槻で旦那は大手企業のサラリーマンで結婚5年で子供はいないという。ある日、イオンのレストランでランチをしていると偶然その麗美さんが入ってきてなぜか?私の横に座って、
「ネネ、伊奈利ちゃん～家はたしか～この近くだったよね...」
「そうけど～」
「それなら、今から服を買ってくるから、それを預かってくれない?」
「えっ、まさか～不倫の片棒をかつげというの...」
「ちがう、違う...その反対で旦那の不倫の証拠を見つける変装用なの」

聞けば旦那は西大路駅近くの会社に勤めているが、どうもその会社のOLと怪しいという。どうせ駅周辺で飲んでいるのだからその店と一緒にいるOLを探すというものだ...麗美さんはジーンズと上着とサングラスと帽子を早速買ってきて私に渡した。その夜、7時には私の家で麗美さんは変装したが、なぜか私もそれに付き合うことになった。

夫の勤める会社の社員通用門近くで見張っていると20分ほどで旦那は1人で退社、そして駅前のタクシー乗り場でタクシーに乗ろうとした瞬間に女性がスルリと現れ2人でタクシーに乗り込んだ。それをタクシーで追跡しようと思ったが、タクシーが1台もなく尾行をあきらめた。麗美さんは、

「いいの～あの女は真希といって経理部の女なの...」
「へえ～わかるの?」
「そら～同じ会社に同級生がいるの、その娘から色々情報もあるし...」

結局のところ変装をするほどのこともなかったが、麗美さんとはその後私の家で酒を飲み旦那の悪口で盛り上がったものです。そしてジーンズを脱いで制服に着替えようとしたが、ジーンズがピチピチなのか酔っているのかなかなか脱げず、私に裾をひっぱれといいながら寝転がったが、私はその上に重なってキスをしていた。麗美さんは冷静な目で、
「伊奈利ちゃん～してもいいけど～旦那の浮気の証拠を見つけるまでは、ここで着替えしていい、そしてまた尾行に付き合ってくれる?」
「はいはい、それで浮気の証拠をつかんだら?」

「そら～慰謝料をふんだくって離婚よ～！」

「そか、それならこっちも約束して」

「な、なにを？」

「麗美さんが、人妻でなくなったときにはこの関係をやめると…」

「あらら、嬉しい～私も実は…好きな人がいるの…」

ふむ～どっちが狐が狸かわからない…もちろん、麗美さんと旦那のことだが…キャハ
(1話完)

音川伊奈利のブログは、

<http://ameblo.jp/inari24/>

<http://plaza.rakuten.co.jp/kyoto24/>

小説「愛の人妻ウォッチング」その2・幸子...10年の恋を10分で...

駅近にカウンターが10席ばかりのラーメン店がある。メニューはラーメンの他には焼飯、餃子のみというシンプルで店員もこの店の夫婦2人だけで切り盛りしていた。午前は11時～2時、午後は5時～8時の営業でこの店のママとマスターの人柄でかなり繁盛していた。

このマスターとママは高校の同級生で高校から男女の仲になりそのまま結婚していた。マスターには近所の女性のお年寄りらのファンがあり、またこの幸子ママさんにも近所の商店主や通勤のサラリーマンから可愛い人柄だと愛されていた。その私も幸子ママファンクラブの一員でもう10年間も「ママ好き...」と告白をしたうえで週3回は通いチャンスを狙っていた。

ところがこの夫婦年から年中どこにいくにも2人一緒、店の中では調理場とレジ近くと離れているために私は口と目で、そして時々手を握ったりお尻を触って愛のサインを送るが、それ以上のことは無理だった。その幸子ママとカウンターで3分ほど話すチャンスが訪れた、私はママに

「いつも仲がいいね～わしはジェラシーで夜寝られない...」

「なに～いつているの...夜はもう何年も別々よ...」

「えっ?なんで～まだ若いのに?」

「そそ、伊奈利ちゃん～伊奈利ちゃんの近くのお肉屋さん、土曜日の午後3時からお肉が半額なの、それで毎週土曜日に焼豚用のお肉を買いに行くから、その帰りに...」

それだけの会話だったが、十分意味は伝わります。なんせもう10年も通っているから「以心伝心」というのか、前置きもテレもないから不思議なものです。そして土曜日の3時15分には幸子さんは私の家にいた。幸子さんは、

「伊奈ちゃん、時間は20分ほどだけしかないの、うちの人が私を疑っているから、気をつけて」

「えっ、まだ、なにもしていないのに疑っているの?」

「いえ、伊奈ちゃんのことではなく、だから...なんとなく疑われているの、わかる?」

「ふむ...?」

「だから、私も疑われているから、なんかしなくては損じゃない?でしょ?...マスターは糖尿で役に立たないから...それでよ～!」

「で、Hしていいの?」

「ほら、もう10分しかないよ、しなくてもいいの?伊奈ちゃん?」

というわけでビデオの早送りのようなHをした後、幸子ママは私に先に部屋から出て周りを確

かめよと命令、そしてこれも命令口調で、

「来週も、20分だから、その段取りをお願いします。来週は私がサービスしたげる、そしてその次は伊奈ちゃんが私にサービスする...わかった？」

とこういいのこして幸子ママは自転車で帰っていった。

そして、その夜の部に店に顔を出したが、幸子ママはまったく普段と変わらなく働いていました。ちなみに注文したのはラーメンの並でしたが、焼豚、シナ竹がどっさりで満足したというお話でした。

(2話完)

小説「愛の人妻ウォッチング」その3...桃香は汗フェチ

夕方の散歩をしていると駅近のメガネ店の中から男性店長が店に入れと合図している。店の中には若い女性がサングラスを選んでいる最中で、店長は、

「伊奈利ちゃん～この近くで女性が1人でも入れる居酒屋さんってある?…」

「えっ～～～なに、なんの話?」

店長がいうのには、この客の女性は駅近くの高級マンションに引っ越してきたが、旦那が海外に出張しているので食事を兼ねた居酒屋を紹介してほしいとのことだ。時計を見るとまだ5時前だが、5時からやっている店は…そう「洋風居酒屋・ポン吉」があるということというとその人妻は、

「あの～私をご馳走させていただきますから…その店の案内を…」

「いやいや、店の案内もなにも、ほらあの店です」と指指したが人妻は、

「いえ～この街はまだ慣れていませんから…」

「いや～私も散歩中で…それにこの汗…加齢臭はあってもフェロモンはありまへん～」

「ひやはは～おもしろいお方…」

というなり、今しがた買った高級サングラスと黒い帽子を被り私の左腕を握ったまま私が指差した「ポン吉」に強引に連れていかれた…

店はほどよく冷えていて汗がスーと引くが、その私の額や首の汗をその人妻は良い匂いのするタオルハンカチで丁寧に拭いてくれている。その「ポン吉」のママのクリポンはそれを冷ややかな目で、

「伊奈利ちゃん～誰、この女…キライ…」と語っているが、それを察したこの人妻も、これも目だけで、「なによ～このアバズレ女…」と挑発しているから女は怖い…。

この人妻は桃香といい結婚して3年目の33才でまだ子供はいないという。その桃香はカウンターで私の左側に座るが、その桃香の右手は私の背中からお尻、はたまた内股に常に滞在している。そして顔というか頭も私の胸か腋周辺にあるから、

「桃香さん、汗で臭くない…」

「ううん～いい匂い…わ、わたし恥ずかしいけど～汗フェチなの…」

「え～～～」

聞けば桃香さんの大学時代はバスケのマネージャーで選手のユニホームから下着までを洗っていた。部室は選手の汗の臭いが充満していてそれが当たり前の生活を4年間してきた、だから汗の臭いがなくなるとなにか落ち着かないという。それに処女を喪失したのもその汗臭い部室…だから

、汗の臭いがそのままHな気分になる誘発剤になると打ち明けてくれたのです。

「ところで伊奈利さんは毎日散歩されているの？」

「はい、ほぼ、毎日…汗をかいています」

「へえ～ほな、家に遊びにいつでもいい？」

「そら～いいけど～男の独り暮らしやから…臭いで…」

「キャー素敵～」

(3話完)

小説「愛の人妻ウォッチング」その4...幸運の女神 摩耶

宝くじ売り場のボックスに飛び切り美人の人妻がいることを発見してから毎週口ト6を買うようになった。そして買うときに必ず4億円当たったら半分あげるという「口約束」が口グセになっていた。そんな日々の朝、近所の幼稚園に白いワゴン車が止まっていた、園児を送迎している母親でその車の中から美人が手を振っていた。それが摩耶さんでその宝くじ売り場の人妻でした。

その夕方、摩耶さんの車のナンバーが「・748」だったのでナンバーズ3の「748」をストレートで買った。そしてその日の抽選で「748」が的中して85000円となったが、これはもちろん摩耶さんのおかげだと思いJR西大路駅近の居酒屋「洋風居酒屋 ポン吉」に誘ったらスンナリ来てくれた。

そして、もし口ト6で4億円が当たったらの架空の話で大いに盛り上がっていた。摩耶さんは、
「そうね～2億円いただいたら、離婚して2人の子供を引き取って暮らします」
「えええ、なんで離婚するの?仲が悪いの?」
「いえ、そうでもないけど～伊奈利さんから2億円も貰ったら、誰でも伊奈利さんと関係があると思うでしょう?...だからそんな言い訳も邪魔臭いから...」
「でも～俺は人妻の摩耶さんが好きで、離婚したら興味がなくなるかも?」
「それなら安心して...私はどうせ1人で生きられないからすぐにまた再婚しますから」
「そか、それならま～いいか～?」

そして居酒屋からの帰り道、我が家の前で摩耶さんは私の手を握り、
「伊奈利ちゃん～私はくじ運が悪いけど～私と関わった人で今まで最高が2000万円当たった人が1人、500万円以上なら5人、100万円前後なら10人以上もいるの...」
「へえ～しかし、その関わるっていうのは?どれぐらいなの?」
「そら～私が好きになった人かな?、でも、伊奈利ちゃんの思っている関係ではないよ...」
「そか～よし、ほなら我々も2億円の山分けの関係になる～摩耶ちゃん」

そしてその夜、摩耶ちゃんと私は2億円の夢をみながら愛し合いました。それから一ヶ月、口ト6の抽選は10回あったが、1000円が4回当たり、儲けとしては2000円しかありませんが、2億円が当たる前兆だと理解してさらに前戯に力をいれています。

(4話完)

小説「愛の人妻ウォッチング」 その5...人妻は鬼子母神、理恵

ある大手スーパーは5%引きの日がたまたま日曜日で混雑していた。私は鮮魚売り場で魚を吟味していると後ろから買い物カゴでお尻をコンコン突かれていたが、混雑のせいだと気にもとめなかった。そしてそのまま肉売り場に横歩きで移動するが、今度は私の腹の肉を後ろからフニヤリとつかまれたから振り向くとそこには黒髪の長い美人がツンとした顔で立っている。

その美人は中学生ぐらいの娘1人と旦那らしき人と3人で買い物を楽しんでいるようで私とは目を合わさない…私は心の中で「うん?痴女?」と首をかしげてレジに並んでいるとまた後ろから買い物カゴがコンコンと尻に当たる。それで後ろを振り向くとさっきの痴女しかいなかった。そして、

「もう～みずくさいのだから～ワタシよ～」

「えっ～?誰?」という顔をしていたら、

「伊奈利ちゃん～蜘蛛ちゃん、元気してる?」

ああああ～あの理恵ちゃん～と思い出したがレジの前にはその理恵さんの娘と旦那がいたのでそれ以上はお話ができなかった。そう、理恵さんは同じスーパーの中のレストランで働いていたのです。思えばある日のこと、近所の交差点で信号待ちをしていた理恵さんはしきりに鞆の中を探していながらため息をついていたのを私が声をかけたのです。そのレストランは私もよく行き顔なじみでした。恵理さんは、

「家の鍵がないの…旦那も娘も鍵を持っているが、旦那は出張で娘は部活と塾で夜の10時にならないと…」

「10時か～まだ5時だし～ほな、私とそこの「洋風居酒屋 ポン吉」でも…」

「いや～それが～私も家がこの近くなので…なにかと…男の人と飲むなんて…」

「それなら私の家にきません」

ということで私の家でビールを飲むことになったのです。

そして1時間ほどした時に恵理さんの腕にポツンと小さな蜘蛛が天井から落ちてきたのです。恵理さんは～ギャーと叫んで私にしがみついてきました。

「ああああ、ごめん、この蜘蛛はここに昔から棲みついています、咬みませんしおとなしいですから…とはいうが、理恵さんは私からは離れようとしません。

もうこうなれば人間なんていうものは本能で口と口とが自然にどちらかたなくひつつくものなんです。口の次はご想像の通り私の右手が恵理さんの胸をまさぐるという段取りになります。さらに理性も教養もどこかに忘れないとお互いに失礼になるのは世の習いどす。。。理恵さんは「

お願い電気を消して…」とはいうが夏の夕方では電気を消してもレースのカーテン越しにお日様が…今でも理恵さんの模様がしっかり脳裏にある。

それにしても女性とは根性があるというのか、勇気があるというのか、たまたま抱かれた男に会っても隠れるどころか旦那や子供にわからないように合図しにくるというのには私も恐れ入谷の鬼子母神…と感心しながらこれを書いています。…………ちなみに我が家の蜘蛛子は今もこのPCの画面の右上にへばりついています。そして寝るのは天井で時々落ちてくる可愛い蜘蛛ちゃんどす。。。

あとがき…いつもその職場の制服姿を見ているが、これが私服に変わるとガラッと変身する女性もいます。看護婦さんなんかもそうですね～白衣の天使が私服では茶髪のヤンキー風というのはよくあります。一方、制服組から客を見ると服は同じですからわかりやすい。街で美人の人妻から笑顔で声をかけられても「誰～？」と悩むことがよくある。

(5話完)

小説「愛の人妻ウォッチング」その6...色白スッピン美人 美幸

ある外食産業のチェーン店のレジ周りのボス的人妻はいつもスッピンの額に汗を流して仕事をしてきた。顔立ちもいいしそれに色白だからなにも問題はない...健康そのものです。私はそんな素朴で健康的な人妻に一方通行の恋をしたのです。

ある日、その美幸(仮名)さんに勇気をもって、
「あのさ～女やからせめて口紅ぐらたついたら...」
「あは～あかん、あかん、わたし～そなん...」

ところがこれから数日たった日、な、なんと～美幸ちゃんの口が赤い...のを発見した。

「おっ～おおお...いいやん～」
「いやん...」
「あんな～美幸ちゃんは綺麗やから、その目の上に青いのを塗ったら～？」
そしたら、その数日後に目の上に青いものが...
「ど、どうしたん～？」
「違うねん...旦那と喧嘩して殴られたん...」

もちろん殴られたのではないが、その次の休みの日には、な、なんと髪の毛を茶髪にしてみました。

「美幸ちゃん～やればできるやん」～♪
「そ、私はやれば出来る女なの...」

それから数日した近所のスーパーで偶然あったが、美幸ちゃんは浮かない顔をしている。「伊奈利ちゃん～ちょっと話を聞いてくれる？」という。「実は旦那の母親とうまくいっていないの～」そ、それならとJR西大路駅近の「洋風居酒屋 ポン吉」へと誘った。聞けば美幸さんは2人の子供と旦那の母親と旦那の5人家族、その母親が「最近、美幸さん、綺麗になったが、これは絶対浮気をしている」と疑ったのが原因でなにかとギクシャクしているという。

そうか～そもそも美幸ちゃんに化粧をしると進めたのはワシだから～少しは責任があるよねという美幸ちゃんは、

「ううん...そんなことより、これから私を抱いてくれない？」
「えっっっ...」

「旦那とも相談したんだけど...やっぱり母親を無視できないから、明日の休みに髪を黒くして、化粧も冠婚葬祭以外はしないと決めたの...」

「あら...そんな時代錯誤がまだ...」

「子供がまだ小さいから離婚もできないし～だからせめてこの綺麗な化粧と茶髪の最後の記念を残したいのよ～伊奈利ちゃん」

そして我が家で美幸との愛を確かめた後、美幸は化粧を丁寧におとして素の色白スッピン美人に変身して元気に帰っていきました。

(6話完)

あとがき・一方通行の恋があるとすれば「進入禁止」の恋もあるよね～そなんんいったらもっとあるな～「Uターン禁止」「スピードオーバー」「暴走禁止」の恋もある。そして恋愛中は「シートベルトを着用」ではなく「コンドームを着用」になる。重量オーバーに注意して、なおかつ「乗車定員オーバー」に「飲酒運転禁止」「誰でも乗せるイエロキャブ」...そうそう、恋の「無免許運転」もあります。恋の違反赤切符は「不倫は即免停」...2回目からは「免許取り消し」3回目で男女とも「裸で市中引き回しの刑」...キープレストとしてはと～「割り込み禁止」「浮気は厳禁」「ジグザク運転禁止」「オカマ禁止?」「**人妻への恋**」←ありり、あっしはキープレストに反する恋をしていたのか～キャハ

小説「愛の人妻ウォッチング」その7 モデル住宅にて 真希

近所のスーパーの跡地は建売住宅の分譲地になった。ここに12軒が建つ予定で工事が始まったのが3ヵ月前、その敷地に3畳ほどの販売会社の簡易事務所がある。私はその前を通る度に中を覗いているが、その中から色白美形インテリ人妻の真希さんが笑顔で手を振ってくれている。

その真希さんと知り合いになったきっかけは私が外から帰って来るとその建売住宅のチラシを真希さんが私のポストに入れていたときになる。真希さんは丁寧に名刺を出して家を買ってほしいというが、私は、

「もしもし、わしは貧乏だから～あかんわ～!」

「いえ、そんなことをいわずにモデルハウスでも見学しませんか?…」

その後、夏の暑い日には工事現場の自販機からアイスコーヒーを買って差し入れしたり、また反対に事務所の冷蔵庫のお茶をもらったりしていたが、12軒目の工事が始まるとその事務所も撤去されていた。そして工事のない日曜日の夕方の5時ごろ真希さんから電話があった。

「おかげさまでほぼ完売いたしました...それで私...今、モデル住宅にいますの～明日はここを引き上げて別の現場に行きます。最後の夜ですからビールもあるし遊びに来ませんか?」

そのモデル住宅は木の香りまで新鮮で家具やベッドまですべて揃っていた。スーパーで買ったのか、唐揚げや寿司までそろっている。それにビールは発泡酒ではなくほんまもののビールだった。それから1時間ほどして真希さんはシャワーを浴びてくるといいながら浴室に消えていた。そして素肌にバスタオルを巻いただけででてきてそのままソファの長椅子に寝転んでいる。私もシャワーを浴びたかったが、このタイミングというのは貴重で遠慮なく真希さんの体を愛撫していた。もうそろそろという時に真希さんのケータイが鳴った。

「はい...お母さん、うん?パパと来てる?来てるってどこに?...えっ～モデル住宅の前...」

真希はそんなにあわてずに私に、

「ゴメン...忘れてた～今日はパパの誕生日で、子供らと食事の約束を...ねっ、伊奈利さん、伊奈利さんの家も知っていますから、今夜は...」

そして真希さんは家の鍵は水道のメーターの中に入れておいて...それから私は部屋の電気を消してから家を出ますから、伊奈利さんはパパの車が発車してから電気をつけて家に帰ると命令口調に...それもパンティー、ブラ、パンスト、服を着ながらの早業で...私は真希さんの白い肌を目に焼き付けるヒマもなく、「はい、はい、わかった」としかいえないほど真希さんは冷静に行動をしていた。

(7話完)

あとかき...週に2回はいく食堂にも好きな人妻がいます。今はこの人妻が一番好きですが、この人妻と道でバッタリお会いしましたが、最初は前から歩いてくる女性が笑顔で手を振ってくれるが私服では誰だかわからなかった。2人とも店では親しいが、外で会うのは初めてで私は舞い上がってしまってなにを話したかは覚えていないが、彼女は私の髪から肌、着ているものまで冷静に観察しているようだ...いや～女性って怖いよね～!

この地に住んでもう17年になります。そして最初の人妻に恋をしたのはその日のこと、その人妻は近所のスーパーで母娘と2人で買い物をしていたが、その2人は一卵性親子かと思うほど綺麗でそっくりだった。その人妻は偶然にも隣の町内でなにかと挨拶を交わすようになっていた。

娘はまだ高校生で当時流行っていたミニスカートの制服に茶髪という派手な娘で可愛かった。それから娘の美樹ちゃんとも会えばなにかと話をしていた。ある日のこと、
「おっちゃん～私...もう20歳よ～あかんわ～もう人生も終わりよ～」
「なにいつてるの～これから結婚して子供も...」
「おっちゃん...お母さんとできてるやろ～」
「えっえええ～そんな～こと」

美樹がいうには、高校のころ夜遊びが派手でその日も朝帰りで私のマンションから母親が出てくるのを偶然2回も見たという。美樹もそのころは不良で父親とは仲が悪かった、あんな親父だから、母が浮気しているのはやむをえないと母親に同情してこの不倫を見て見ない振りをしてくれたという。

「それは～それは...美樹ちゃん、感謝」
「おっちゃん、それだけと違ってお母さんは私の下着も内緒で着てたんやで～」
「あれ～あのセクシーなパンツ美樹ちゃんのだったの？」
「感謝しているなら、私も遊んでよ～」
「あかんねん～おっちゃんは人妻専門やねん～」

なんてことをいっていたらその娘も去年結婚してこれも近くに住むようになりました。そして、今日のさっきのこと...いつものスーパーで買い物をしていたらこの母娘にバッタリ会いました。

「おっちゃん～ほらほら、私も人妻になったからいいやろ～」
「な、なにが～？」
「前、いうてたんや～人妻になったら私も好きになってくれると...」
「あ～あれ...ネ～！」

そらま～お母さんよりは若い分、爽やかで綺麗だが、その隣には母親がいるのに～もう～と思っているのを察した母親は、
「あらら、伊奈利さん...うちの娘と浮気していたの～！」
「いや～それは～その～」

(8 話完)

「愛の人妻ウォッチング」その9...サークルKの慶子さん

小説「愛の人妻ウォッチング」その9...サークルKの慶子さん

私は毎日夕方に小1時間ほど健康のために散歩をしています。

ある37度5分の日はずがにスーパーやコンビニに入って数分休憩しなければ熱中症で倒れてしまうとサークルKに入った。物を買う気がないから遠慮がちに入り口で涼をとっていたら、ある人妻のパートの店員が、

「暑いでしょう～もう少し中に入って涼まれたら～？」

「あっ、はい...ありがとうございます」

そして次の日も次の日もサークルKで涼むようになりましたが、さすがに何かを買っていました。そうこうするうちにその人妻の胸には「たなか」(仮名)という名札があり名前がわかった。

その夜はいつも近所の「洋風居酒屋 ポン吉」で仲良くしてもらっている飲み友達がいまいましたが、その友人が仙台に転勤ということになりその店の主催で貸切の送別会になりました。その友人に奥さんも一緒に行くのかと聞くと彼は単身赴任で行くという。その話題の中で彼の奥さんは若くて綺麗な35歳だということがわかりました。そしてその奥さんはパートでこの近所のサークルKで働いているということまで。

「え～田中さん、ひょっとして...あの、色白で美人のあの人？」

そしてその明るる日にサークルKに行き、それとなしにその田中さんに、

「旦那って...仙台に転勤になった田中さん～?で、その奥さんですか？」

「はい、いつも主人がなにかとお世話になっています」

その後、慶子さんのパートが5時に終わることを聞き食事に誘いました。そして3回目のデートで慶子さんのマンションの部屋に誘われてしまうほどHな雰囲気になっていたのです。部屋は高級マンションの部類にはいるほど広くて綺麗にしてある。ワインを飲みながら慶子さんは、

「この部屋も買い手がつけばすぐ引っ越しになるの...」

「えっえええ～なんの話～？」

その話によると、この夫婦は夫の転勤を機会に離婚していたのです。財産分与はこのマンションを売って半額をもらうということだというのが...この話で興奮していたHな気分もどこかに飛んでいく、いえ、大事なもので急激に萎えていた。私は先に風呂に入れとすすめる慶子さんに対して丁重に失礼のないようにお断りして帰ってきました。だって～あっしは人妻という2文字に恋をしているのです。。。どんなに若くても綺麗でもそれは同じです。。。人妻専科に誇りを持っているのです。

それから数回慶子さんから誘いのメールをいただきましたが、これも丁重にお断りして以後、このサークルKの前は通らないことにしました。

(9話完)

★～あとかぎ...この↑小説は書いている私でも欲求不満になるほど健全なものです。以前はこのブログで官能小説なんかも書いていましたがすぐ消されるのです。でもさ～このネット時代では中学生ぐらいでも官能小説の知識ぐらいはあるものね～かえって私らのような団塊世代のほうが性に関しては無知かも～キャハ

小説「愛の人妻ウォッチング」その10...人妻からの黄色いハンカチ 綾

素人料理「キッチン・あや」の看板を上げてはいるが味は私の好みにあっている。その綾子ママはこの店は居酒屋風で一応焼酎のキープもしているが、この店は食堂だと一步も譲らない頑固さも持ち合わせている美人の人妻です。旦那はサラリーマンで店には一切タッチも出入りもしていないそうで自宅は歩いて5分のところにあるから店と自宅とは同じ町内になる。

店は座敷が2テーブルでカウンターは10席ほどある。この店ママが食堂というだけに昼はランチ、夜は5時開店で10時には閉店という健全なムードになっている。42才の色白で少し小柄だが、愛居のある接待で地域の老若男女からも愛されている。ある日、ラストオーダーの9時45分になったのでママに勘定をたのむと何を聞き違えたのか?エプロンのポケットから黄色いハンカチを出して手渡された、そして先に2組いた客を玄関まで送り出していた。そしてママは店の戸締りをしてから生ビールを二つ手に持ち私に座敷に移動しろと目で合図した。ママは私の横に座り、

今夜はアルバイトの幸ちゃんがお腹が痛いと言ったからいいけど~これからは伊奈利ちゃんとお話したい時はお勘定のときにこの黄色いハンカチを渡すから10時過ぎに電話して、そして横の道路の勝手口から入ってきてというのが、急に前触れもなくこんな話になって目をシロクロさせていたら、

「あら、伊奈利ちゃん、私との約束は覚えていないの?」

「えっっ、なんか約束した?」

綾子ママがいうのには、私がカウンターでママのグチを聞いていたが、そのグチというのはまだ私は若いのに旦那がセックスレスというか、この店を始めてから寝る部屋を別にしたのをいいことにHを3年もしてくれないということだった。そこで私が冗談で「ママだったらいつでも私が抱いてあげます」といっていたらしい...ママは口ごもりながら、

「もう~あれはウソだったの...」と泣く振りをしていた。

もうそのときは私の右手はママの自慢の胸に手が伸びていた。ママはまだ泣く振りをしているが、ママの左手は私の太ももの内側を愛しく撫でていた、そして、

「伊奈利ちゃん、約束して、私は人妻だから不倫はしたくないの、絶対に下半身は触らないで、その代わりに私は伊奈利ちゃんを手や口で...」

うん?私は酔った頭と興奮して舞い上がった頭でママの言葉を整理していた。

え～とまず①下半身はダメだが、オッパイとキスはいい。②私の体を一方的に愛撫してくれる。
なんてことを整理してママに「それでママはいいの?」と聞くと、
「私はこれでもドSなの…旦那もドSで相性が合わないの～」
「ええええ～そらあ～いい、実はわしはドMなんや～」
「へえ～やっぱりネ～私ってそんなことはすぐわかるの…ホホホ」

とこうしてドMの私は1時間ほどドS綾子ママにいいようにされていました。それから一週間、明日は店の定休日だから、今夜はママから黄色いハンカチを手渡されそうな気がします。ちなみに女性の20%はSで男性は30%がMだそうですから、それがわからず結婚した夫婦にセックスレスが多いということかな?つまり相性が合わないということです。

(10話完)

おなじくショートショートの小説もあります。

「小説 スーパーの女性たち」 1話～10話

<http://p.booklog.jp/book/102965/read>

音川伊奈利のブログは、

<http://ameblo.jp/inari24/>

<http://plaza.rakuten.co.jp/kyoto24/>